

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

シリーズ「聖書における光の概念」(No.5)

## シャハイナ・グローリーの諸相 (2)

【聖書箇所】 出エジプト記 40 章 34～38 節

### ベレーシート

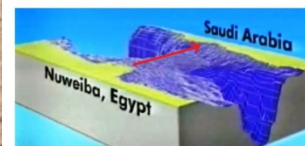
●20分ほど YouTube のビデオ(ドキュメンタリー「本当のシナイ山」)を観ていただきました。前回のメッセージで、モーセが神から「イスラエルの民をエジプトから連れ出せ」という召命を受けた場所が「シナイ山」の麓であり、そこでモーセは「燃えているのに燃え尽きない柴」という不思議な光景を見たという話をいたしました。ところがその後このビデオを観て、これまでの出エジプトのルートとは異なる新たなルートがあることを知りました。それは画期的な考古学的な発見によるもので、きわめて有力な説であることが裏付けられています。しかもそれが発見されたのはすでに 20 年前です。



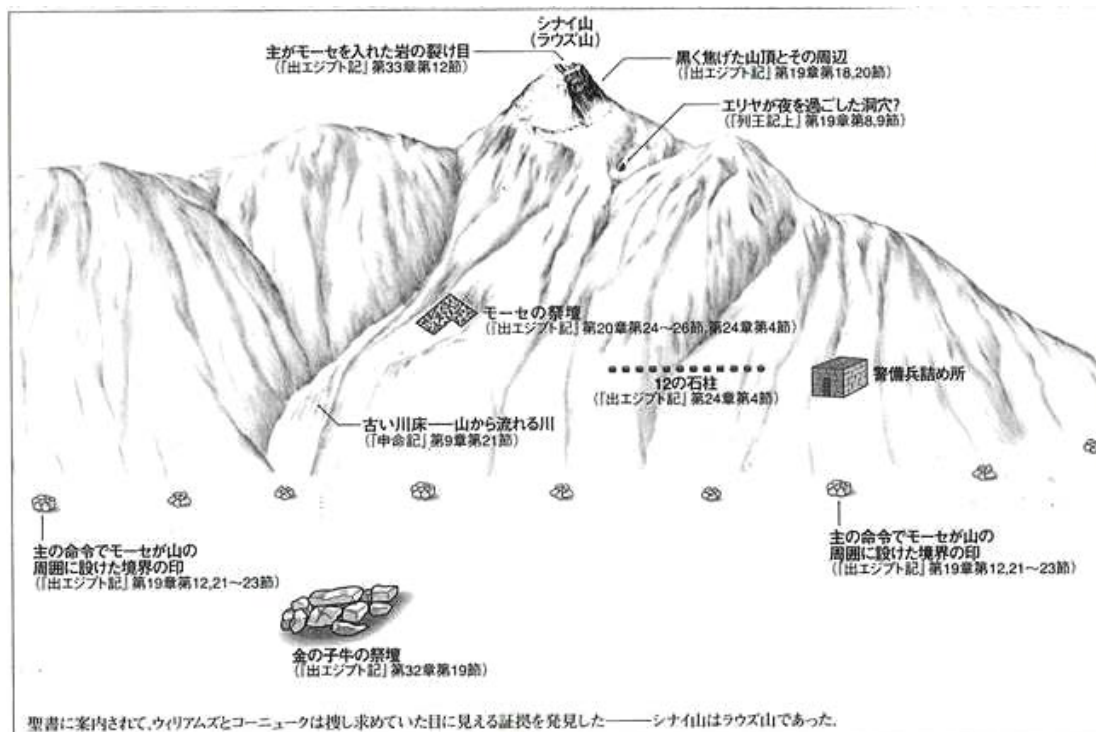
【図 1】



【図 2】



【図 3】



●このビデオを観て私が驚いたのは、従来のシナイ山は、3, 4 世紀にコンスタンティヌス皇帝の母ヘレナによって認定されたものであること。しかもそこが聖書に出て来るシナイ山であることを示す考古学的証拠が

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

何一つ存在しないこと。しかし新しいルートでは、聖書に記されている事柄の考古学的証拠が発見されているということです。海を渡ったとされる新たな場所(図 2 の黄色の丸枠で囲った場所—今日の航空写真)には、約 200 万人が集結可能な砂浜があるだけでなく、その沖合は浅瀬になっており、その海底には珊瑚がくっついたエジプト軍の戦車の車輪が発見されているということなどです。

●関心のある方は、<https://www.youtube.com/watch?v=QdMDm3apWzU> をご自分でご覧ください。また、フルダ・K・伊藤著「一人で学べる出エジプト記」(文芸社、2010年)にある「補注18、355～360頁」も参照のこと。たとえこのことが事実であったとしても、今回扱うことになる「幕屋」における「シャハイナ・グローリー」—主の栄光の現われ—の諸相については何の支障もありません。

●さて、神がやみの中から呼び出された「光」(「オール」 אור)の概念は、世界の基が置かれる前から「あらかじめ定められていた」神ご自身の緻密なご計画、深淵なみこころ、そして神の御旨と目的を含んだものであること。その「光」と密接に関係する語彙として二つの語彙を前回で紹介しました。その一つは、天地創造にかかわった神の「知恵」(「ホフマー」 חֵכֶּמָה)で、「人の心に思い浮かんだことのないもの」です。そしてもう一つは、永遠の神のうちにある信頼という重い事柄としての「栄光」(ヘブル語では「カーヴォード」 כְּבוֹד)があることをお話ししました。「光・知恵・栄光」これら三つが人間の目に見える形で現われる時、それが「シャハイナ・グローリー」ということばで表現されるのです。神の歴史の中で目に見える形として現わされた「シャハイナ・グローリー」の表象は、光、火、煙、雲、雷、いなずま、密雲(やみ)、そして御使いなどですが、その極めつけは人となられたイエシュアご自身です。しかし重要なことは、他のいずれの表象の中にも御子「イエシュア」の存在があるということを心に留めていただきたいと思います。なぜなら、この方こそ「光」と「知恵」と「栄光」を結びつけている方だからです。今回、これらがひとつになって現わされた「幕屋」に焦点を当ててみたいと思います。

## 1. 幕屋に現わされたシャハイナ・グローリー

●神の山ホレブで召命を受けたモーセは、エジプトから導き出す民をこの山(ホレブの山)で仕えさせよと神から命じられました(出3:12)。神の不思議なみわざによってエジプトを脱出したイスラエルの民は、それから三か月目にホレブの山の麓まで来て宿営し、そこで神である主と合意に基づく契約を交わすこととなります。これが「シナイ契約」と言われるものです。その契約が交わされる流れは以下のとおりです。まずは、民に語るべきことがらがモーセに告げられます。

【新改訳改訂第3版】出エジプト記19章3～8節

3 モーセは神のみもとに上って行った。【主】は山から彼を呼んで仰せられた。「あなたは、このように、ヤコブの家に言い、イスラエルの人々に告げよ。

4 あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に載せ、わたしのもとに連れて来たことを見た。

5 今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。

- 6 あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。」
- 7 モーセは行って、民の長老たちを呼び寄せ、【主】が命じられたこれらのことばをみな、彼らの前に述べた。
- 8 すると民はみな口をそろえて答えた。「**私たちは【主】が仰せられたことを、みな行います。**」それでモーセは民のことばを【主】に持って帰った。

●まさに合意に基づく契約を交わそうとしています。その契約の内容を受け取るために、モーセは再び山に登り、神からその契約の内容を受け取ったのです。民はその内容を、モーセを通して知らされました。そのときにも民たちは声をひとつにして「主が仰せられたことをみな行います。」と答え、そのあかしとして、イスラエルの12の部族にしたがって12の石の柱を建てました。その柱の跡が、先ほど述べた「新しいシナイ山」のふもとにあることが確認されています。

●シナイ山は全山が煙っており、その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山が激しく震えていました。煙が立ち上るということはそこに火があることを示しています。モーセだけ何度もシナイ山に上っていますが、その都度、雲が山をおおっていました。それは主の栄光がシナイ山にとどまっていたことのしるしです。その主の栄光は、イスラエルの人々の目には「山の頂で燃え上がる火のように見えた」とあります(出24:17)。

●40日40夜、モーセは山で主から示されるさまざまなことを聞いていましたが、その中に「幕屋の建造」についての詳細が告げられます。その「幕屋建造」の目的はただ一つ、それは「わたしは彼らの中に住む」ためです。この「幕屋」は、目に見えない神の「光」、および「知恵」、そして「栄光」の「写し」(影)が目に見える形として現わされたものです。ですから、その幕屋は「光であるイエシュア」、「神の知恵であるイエシュア」、「永遠の栄光であるイエシュア」が結集されたイエシュアご自身の型なのです。その「幕屋」についての詳しい学びは、来年(2016年)1月に入ってからしたいと思います。

●エジプトを脱出したイスラエルの民は、ちょうど一年後に、神の山ホレブの麓に「幕屋」を建造します。この幕屋建造のためには多くの材料が必要でした。イスラエルの人々はそのために、エジプト脱出の際に持ってきた(エジプトからはぎ取った)多くのものを自ら進んでささげました。幕屋建造のために、ユダ部族のフルの子であるウリの子ベツアルエル、およびダン部族のアヒサマクの子オホリアブがこの働きのために名指しで指名されました。主は彼らをすぐれた知恵で満たし、幕屋の中で使われるすべてのもの一彫刻や刺繍の模様に至るまで一の設計をする仕事をさせたのです。そして「台座を据え、その板を立て、その横木を通し、その柱を立て・・・」と、主がモーセに命じられたとおりに、幕屋全体が組み立てられて行きました。しかし最終的なチェックは神から示されたモーセしか行うことができません。そこで、モーセは幕屋建造のすべてが「主が命じられたとおりに」になされたことを確認して、彼らを祝福しました。

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 40章17節、34~38節

17 第二年目の第一月、その月の第一日に幕屋は建てられた。

34 そのとき、雲は会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。

35 モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。

36 イスラエル人は、旅路にある間、いつも雲が幕屋から上ったときに旅立った。

37 雲が上らないと、上る日まで、旅立たなかった。

38 イスラエル全家の者は旅路にある間、昼は【主】の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があるのを、いつも見ていたからである。



●神と人とが共に住むという「幕屋」は、神の永遠のヴィジョンである「聖なる都、新しいエルサレム」(黙示録21:2~4)の型です。幕屋には、神と人とが共に住むという神のご計画、神のみこころとその御旨と目的が、神の深遠な知恵によって、神の栄光を秘めた形で表されているのです。とすれば、それを知るためには、目に見える「幕屋」について詳しく学ぶ必要があるのは至極当然のことです。

●「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」(ヨハネ1:14)とあります。この「住まわれた」という動詞こそ「幕屋を張られた」という意味なのです。ギリシア語では「スケーノー」(σκηνόω)、ヘブル語では「シャーハン」(שָׁחַן)となります。ヨハネはここで、ことばであるイエシュアこそ「幕屋」そのものであることを紹介し、その福音書の中でイエシュアこそ「幕屋」そのものであり、神と人とが共に住むことを実現するお方であることをあかししたのです。イエシュアはユダヤ人の指導者たちにこう述べています。「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」(ヨハネ5:40)。これは今日の私たちにも言えることではないでしょうか。その証拠のひとつに詩篇1篇に記されている「幸いなのは、その人」の「その人」がだれのことを指して言われているのか分からないのです。

●主がイスラエルの民の中に住むために建造させた「幕屋」(「ミシュカーン」מִשְׁכָּן)を、聖書では以下のようにいろいろな言葉で言い換えています。「主の幕屋」「あかしの幕屋」「会見の天幕」「会見の天幕である幕屋」「あかしの天幕」「聖所」「主の聖所」「主の家」などです。ソロモンの時代には「ミシュカーン」は「神殿」となります。「ミシュカーン」という語の語源は「住む、とどまる」という意味の「シャーハン」(שָׁחַן)という動詞で、神の栄光の臨在を表わす「シェキーナー」(שְׁכִינָה)と同語根です。また「天幕」(「オーヘル」אֹהֶל)は、「落ち着く」「住む」という動詞「アーハレ」(אָהַל)から来ています。

●モーセが「宿営の外」の離れたところに張った「天幕」は、「会見の天幕」(出33:7)と呼ばれます(新共同訳は「臨在の幕屋」と訳しています)。それは、宿営の真ん中に設置される「天幕」、すなわち「幕屋」とは異なり、「幕屋」が完成するまでの間、人々が主を求めるための臨時の天幕として監視付で設置されたものです。その臨時の天幕でも、「モーセが天幕に入ると、雲の柱が降りて来て、天幕の入口に立った。主はモーセと語られた。」(出33:9)とあります。それと同じ雲の柱が、幕屋が完成された時に再び降りて来ています。幕屋は、神と人とが共に住むということがどういうことか、そしてそこにどんなに深い知恵が隠されて

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

いるか、またそこにかに重い永遠の事柄が隠されているかを、私たちに啓示しているのです。その隠された事柄を知ることが、私たちが主を知り、主を求めることです。しかしその事柄の全貌を知るとは今の私たちには許されていません。それが見えたと思っても、あるいは知り得たと思っても、それはまだ一部分であり、ぼんやり映るものを見ているに過ぎません( I コリント13:12)。

●「【主】の栄光が幕屋に満ちたとき、モーセは会見の天幕に入ることができなかった。」(出40:34~35)とあります。それはどういうことなのでしょう。神の友として神と親しく語り合うことのできたモーセです。幕屋にいつでも自由に入ること許されていたモーセでさえも、神の栄光が幕屋に満ちたそのときは、そこに入ることができなかったのです。その一つの解釈は、主の栄光が天幕の中に照り輝いたために、つまり、余りに眩しすぎて入って行くことができなかったのではないかとと言えます。

●ソロモンが後に神殿を建てて奉獻した時に、雲が主の宮に満ちて、「祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかった」とあります( I 列王記8:11)。ここでの主の栄光は目が眩む程のまぶしく輝く栄光ではなく、その反対、つまり真っ暗な密雲が主の宮を満たしたので、立っていることができなかったということです。主の栄光は、ある時は真っ暗な蜜雲の中に、時にはまぶしい輝きの中に現わされたということです。

## 2. 栄光の雲がイスラエルの民を導いた

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 40章36~38節

36 イスラエル人は、旅路にある間、いつも雲が幕屋から上ったときに旅立った。

37 雲が上らないと、上る日まで、旅立たなかった。

38 イスラエル全家の者は旅路にある間、昼は【主】の雲が幕屋の上に、夜は雲の中に火があるのを、いつも見ていたからである。

●幕屋の上をおおった「雲」は神の臨在の象徴です。実は、この雲は幕屋が完成する前から、常にイスラエルの民をおおっていたものでした。「雲の柱」と「火の柱」とは別々のものではなく、一体のものでした。昼間は「雲の柱」として見えていたものが、夜には「火の柱」として見えたのです。ですから、「雲の柱」と「火の柱」は、神の臨在を象徴する一つのしるしなのです。

●「雲」についての記述は、出エジプト記にはすでに四か所で記されています。

雲の柱「アンムード・アーナーン」(אֲנָנִים וְעַמֻּדָה)

火の柱「アンムード・エーシュ」(עַמֻּדָה וְאֵשׁ)

出 13:21 【主】は、昼は、途上の彼らを導くため、雲の柱の中に、夜は、彼らを照らすため、火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった。

出 13:22 昼はこの雲の柱、夜はこの火の柱が民の前から離れなかった。

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

出 14:19 ついでイスラエルの陣営の前を進んでいた神の使いは、移って、彼らのあとを進んだ。それで、

**雲の柱**は彼らの前から移って、彼らのうしろに立ち、(一そのために真っ暗な闇がエジプトの陣営を襲ったために、思うようにイスラエル人に近づくことができなかったのです)

出 14:24 朝の見張りのころ、【主】は**火と雲の柱**のうちからエジプトの陣営を見おろし、エジプトの陣営をかき乱された。

●昼間には日陰となる「雲」、夜は火のように輝く「雲」、それは実に不思議な雲です。ずっと動くことなくとどまっている雲など、この世には存在しません。雲はたえず動いており、どんなに曇っていてもやがては晴れます。もし雲が動くたびに移動していたとしたら、気まぐれな雲の動きに翻弄されて疲れてしまいます。ところが、神の臨在を象徴する「雲」は、灼熱の太陽を覆って身を守ってくれるだけでなく、出発や移動を促す「時」を知らせる役割もあったのです。この雲はまっすぐに立っており、「雲の柱」と呼ばれています。「柱」は「アンムード」(אֲמוּדָה)で、「雲の柱」「火の柱」として民を守り導きました。イスラエルの民たちはこの雲が幕屋から離れ上がったときに旅立つことになります。雲が動くまではイスラエルの民はそこにとどまり続けました。したがってイスラエルの民は、いつも「雲」を見ていなければなりません。

●「**旅立った**」と「**宿営した**」の二つの動詞は民数記の特愛用語です。「旅立った」と訳されるヘブル語は「ナーサ」(נָסָה)。本来は「天幕の杭を引き抜く」という意味で、出発する、旅立つ、移動するという意味になります。旧約146回のうち、民数記では89回使われています。もうひとつの「宿営した」と訳されるヘブル語は「ハーナー」(חָנָה)です。本来は「(陽が)傾く、野営する、天幕を張る」という意味で、そこから「とどまる」という意味が派生しています。旧約143回のうち、民数記では74回も使われています。

●雲の導きによってただちに「旅立つ」ことは、ある意味で変化のある楽しい時かもしれませんが、いつ動くともなくじっとある場所に「宿営する」(とどまっている)ことは、ある人にとっては苦痛かもしれません。しかし主にある者たちの歩みにおいては、「とどまる」ことをしっかりと学ぶ必要があるのです。なぜなら、イエシュアはしばしば弟子たちにそのことを強調されたからです。「わたしにとどまっていなさい」と。それは神の臨在の雲の中で主との親しい交わりのときを過ごすことだからです。雲がとどまるのは、主との親しい交わりへと招くためです。出エジプト記24章15～16, 18節にはこうあります。

15 モーセが山に登ると、雲が山をおおった。

16 主の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。

18 モーセは雲の中にはいって行き、山に登った。そして、モーセは四十日四十夜、山にいた。

●主はモーセを雲の中から招きました。そしてモーセはその雲の中に入って40日間、主との親しい交わりをする機会に恵まれたのです。神の臨在の象徴である雲の中に入ることは、神との親しい交わりに招かれるしるしです。やがてそこから新たな啓示が与えられ、新たな旅立ちがはじまるのです。それゆえ、私たちは「**雲の中に入ること**」を訓練されなければなりません。なぜなら、「主は雲の中からモーセを呼ばれた」からです。今日もこの雲は、聖霊という形で私たちに寄り添っておられるのです。

「すべてのことが神からはじまり、そして神により、神へと至る」(私訳 ローマ 11:36)

2015. 12.27